

支部研究部 2019 年度活動総括

研究部長 楠橋 佐利（豊能町立吉川小）

1. はじめに

「子どもも教師もやりたくなる授業づくり」というテーマでの2年目になった今年度は、イレギュラーの連続であった。前半の研究部例会は、笹田先生の支援学級での取り組みと楠橋の4年生におけるタグラグビーと、研究部メンバーの実践を報告検討できたものの、様々な事情により2回目の例会からは、研究部外からの実践も含めての報告となった。さらに、例会開催の時期が来るたびに、コロナ禍により中止や延期が繰り返され、今年度の活動が来年度（2020年度）にまで延びることとなった。

2. それぞれの例会について

（1）子どもも教師もやりたくなる

授業づくり①

－支援対象児への体育実践・

4年生のタグラグビー実践から学ぶ－

2019. 11. 9（土） 於天王寺区民センター

支援対象学級での跳び箱を中心とし、アフォーダンスの視点を取り入れた笹田先生の実践はと4年生を対象に初めてタグラグビーに取り組んだ草宇橋の実践の2本であった。笹田実践では改めて「アフォーダンス」への理解とそれをどのように実践に生かすかについて話し合われた。また、タグラグビー実践は、子どもたちの空

間認識とそれを作り出す工夫について話し合われ、次の実践が望まれるものとなった。

（2）子どもも教師もやりたくなる

授業づくり②

－3年生のフラッグフットボール・

4年生の跳び箱実践から学ぶ－

2020.6.13（土） 於大阪保育運動センター

実際には、2月29日に予定していた例会であったが、5月9日に延期になり、さらに第3回の例会予定日であった6月13日にまでずれ込んだ。さらに、開催地からのオンラインによる参加者もあるという新しい試みにもなった。しかし、内容は、何度かの延期に伴い、研究部内での2つの実践への理解も進み、報告内容も初めよりより吟味されたものとなった。中村先生のフラッグフットボール実践は、3年生に対する自洗であったが、前年度の5年生への実践からの継続的なものとなり、参加者にとっては分かり易いものとなった。笹田先生の4年生の跳び箱実践は、「一瞬を一瞬で終わらせない」という跳び箱での新たな試みとなった。シンクロマット実践にも影響を受け、跳び箱を使った表現運動として独自の新しい学習構想となった。子の実践から「表現としての跳び箱運動」について改めて考えさせられ⑦実践内容であった。

(3) 子どもも教師もやりたくなる
授業づくり③
—今、改めて 運動会を創る—
2020.10.31 (土) 於天王寺区民センター

2019年度6月13日に予定されていた「運動会を再考し、新たに創り上げる」ことをコンセプトとした例会であった。しかし、コロナ禍の中、時期がずれ込み2020年度の第1回目の例会となった。

あらかじめ、支部会員に「運動会についてのアンケート(記述式)」をお願いし、運動会について改めて考えていった。アンケートの項目は、次の6つであった。

- ① あなたの所属校では、運動会が開かれますか？開かれましたか？(選択肢あり)
はい いいえ まだ決まっていない
運動会はないが代替え行事を行う
- ② ①の回答は、どのようにして導き出されたのでしょうか？話し合いの途中も含めてその経緯をお答えください。
- ③ ①で答えた経緯の中で、職場での話し合いの様子(賛成意見、反対意見)などについてお答えください。
- ④ ①～③について、あなたが思っていること(疑問や不安、不満など)をお書きください。
- ⑤ あなたが考える「運動会の価値」とは何ですか？
- ⑥ そのほか、運動会について思うことや質問・疑問があれば何でもお書きください。

これを研究部のメンバーが2人ずつで分担して集約し、そこに感想・コメントをつけて交流し合った。さらに、研究部内で討議しアンケート集約に対するコメントを例会で報告した。そのうえで、研究部員の安武氏、兵庫から来ていただいた岨先生の運動会実践報告という3本柱で進められた。(詳しくは、本誌「例会報告」参照)この例会を通して、運動

会についてのとらえ方を共有し、1カ月後に行われた支部大会(2020.11.22・23開催)の運動会分科会につなげていった。のちに報告されるであろうが、支部大会運動会分科会には、兵庫から岨氏、東京から吉澤氏を招き実践報告をしてもらい、30名近くの参加者があった。

3. 成果と課題

2年目となった「実践をもとに集い話し合う」例会スタイル。研究部員の実践を中心に研究部で検討し、その上で行った実践を例会で深めるという一定の形は出来上がった。しかし、研究部のメンバーのそれぞれの所属での状況により、実践を行うことが難しい実態も生まれ、今回は、研究部外から窪田先生や岨先生にお願いして報告をしてもらった。今後もこのような形になることも予想され、「研究部」としてどのように実践に向かっていくのか？さらに、研究内容についても再考する必要があるのでは、という問題も生まれてくる。ただ、多くの実践を支部会員と共有し、その実践分析の中心になるのは研究部員という、シンプルな構造自体は大切にしていきたい。その上で、研究部活動の重点として、教師の多忙化やコロナ禍における会議の在り方(ウェブ会議が増える)も含めて、来年度の研究部員と共にこれらの課題について考えていきたい。